◆ライフコース論とライフヒストリー論

ＬＣ社会学
ノート４

●１．人生の中の歴史性への着目

▼ａ．「　　」（　　）

＝歴史的状況に規定されつつ、年齢階層制を含む社会制度によって具体化され、個々人が人生上のさまざまな出来事を経験するタイミング・間隔・順序といった過程・連鎖にみられる、役割移行と人生軌道とが連関する文化パターン

「通常の」ライフサイクルという発想とズレてきた人々の生き方の現実と多様性
…いつの時代にも同じ周回ということではなく、時代ごとに異なる道筋
↑非婚・結婚・離婚・再婚の多様化／個々人ごとに生活の異なる老年期
…家族の発達段階的見方から自由に／家族も個々人の人生の相互依存たるイメージへ

▼ｂ．その構成要素－D.プラース『日本人の生き方』（岩波書店）

「人生を紡ぎだしていく職人としての人間」

①文化的要素－「　　」(pathway) …生気をあたえる神話(life giving myths)

②関係的要素－「　　」(convoy)　…重要な他者(significant others)

cf. 同級会＝再集団化集団

③個人的要素－（持続的な）自己イメージ(perduring self-image)

cf. カウフマン「　　」

▼ｃ．その視点の特徴

（１）多元的な時間の積み重なり

個人時間＋家族時間＋社会時間（集団・地域・産業…）＋歴史時間

（２）年齢への着目

年齢規範の存在…年齢による成員のカテゴリー化、それに基づく社会規範の成立

年齢階層制＝社会や時代ごとに異なって定められた年齢階梯を一段ずつ上がる

cf. 義務教育期間、成人年齢、定年年齢

（３）コーホートの発想

コーホート(cohort)＝同時経験集団：同一時点で同一的経験をした人々

ある経験の同時期性・歴史体験の共有→次の経験の同時期性・類似性へとつながる

他のコーホートとの相違のほうに着目

- 各種のコーホート…
- 歴史的刻印　　…

⇨人生へ影響を与える要因の重なり

［　　］効果＝加齢(aging) ＋時代(period)＋コーホート(cohort)

▼d．マクロ水準での変化

①ライフコースの制度化

個人の人生過程において規範や法律、組織などを通じて社会からの規制が強まる傾向

②ライフコースの標準化

特定の事象やその発生順序などが特定の集団において普遍的になり、タイミングも均一になってくること

③ライフコースの個人化

伝統的拘束から解放されて、個人が自らの人生に対する当勢力が増大する過程

●2．人生の中の個人性への着目

▼a．「　　」（　　）

自伝的な語りとして、口頭で主観的・回顧的に語られた人生とその表現。

cf. トマス＆ズナニエツキ『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』

⇨重要な質的社会調査法のひとつ（←→量的・統計的な調査法）

インタビュー／自伝／日記／手紙

ex. 自分史…庶民・普通の人の自伝／「自分探し」のための一手法

→自分史と言いながら、実際は自分ネットワーク史

cf. 小林多寿子『物語られる人生』学陽書房

▼b．その語りの特性

①選択性－LHは過去の経験の単純なコピーではない。過去の無数の事実から有限個の事実を取り出し、語る。何を語り、何を語らないのか。

②因果性－単純な時間的順序というより、本人が考える因果的順序によって結ばれた諸事実が語られる。

③状況規定性－選択し、因果連鎖で結びつける主体は「現在」を生きている。LHは「現在」という浮動する視点から回想された人生の物語。回想する時点が異なれば、微妙な、あるいは劇的な変化が生ずる。

●3．3概念の関係の位置づけ

1)ライフサイクル　…規則性・周期性

“人間の人生はいつの時代も、誰もが似たようなものである。”

2)ライフヒストリー…個別性

“ひとりひとりの人生は、全く違う個性的なものである。”

3)ライフコース　…歴史性

“両者の中間として、世代と時代に規定されつつ、世代と時代ごとに異なるのが人生である”